

「新医師臨床研修制度の多元的評価」

小松崎 俊作（東京大学大学院）

医師の総合的診療能力の向上や、プライマリケアの充実、研修医の待遇の向上などを目的とし、2004年4月より新しい医師臨床研修制度が必修化された。ところが、ここ数年の医局の弱体化と関係して、本制度が医師の引き上げや医師偏在など様々な問題を引き起こしているという指摘がある。一方で、研修医の満足度は向上しているという報告や、制度の理念を評価する声もある。本研究では、新医師臨床研修制度が当初の目標を十分かつ効果的に達成しているか、制度導入の目的そのものは患者を含めた医療の現状から見て適切なものであるか、また新研修制度導入に伴って社会全体にどのような意図せざる影響が表れているのかについて分析し、新研修制度が最終的に望ましい医療・社会を実現することにつながるのかという観点から、Fischerによる政策評価のフレームワークを用いて多元的に評価を行う。今回の研究会では、(1) 2008年7月から実施している文脈レベルでの研修プログラム分析、(2) 社会レベルでの制度評価に関する仮説の2点について発表する。特に、文脈レベルでの評価では、岡山県を中心とした岡山大学医学部の旧関連地域（いわゆるジッツ）を対象地域として、研修医・指導医・コメディカルら計38名を対象としたインタビュー調査を実施した、県南・県北各1病院における研修プログラムの評価について分析内容を紹介する。